
秘密の双子姫～新米同心3人衆の受難～

かれいど すこーぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密の双子姫〜新米同心3人衆の受難〜

【Nコード】

N7420L

【作者名】

かれいど すこーぷ

【あらすじ】

同心佐倉一真は、去年から奉行所に勤め始めたいわゆる新米同心である。

叔父である大旗本岩木左衛門尉善紀の命によって、城下に連れ出された將軍の側室、天照姫を内密に大奥に戻すという役を引き受けてしまう。

一真は友人の大堀兵庫、清島安次郎とともに姫の護衛をするのだが・
・。

序幕（前書き）

連載を初めて書いてみました。

オチまで考えているので、ぼちぼち手直ししながら投稿していきたいと思います。

序幕

手を取り合って涙を流す双子姫

丸い窓から月光が

まあるくまあるく二人を照らす

「恨みまするか」

一人がつぶやく

「恨みませぬ」

一人がつぶやく

やがて、東の空がしらじらと

二人の別れを告げようと

渡鳥がピヨウと鳴く

絡めあった二人の指は無下に引きちぎられ

一人は部屋で朱色の姫装束

もう一人は白い襦袢で箱の中

ああ、もう生きて会うことはないだろう

月よ、月よ

助けておくれ

江戸の春霞の下の汚泥のような陰謀から

どうぞ「姫」^{わたし}を守っておくれ

第一幕 新米同心たちの受難 その一

新米同心、佐倉一真は奉行所で書類をつけていた。
とはいっても、自身番でつける日誌をまとめて書いているだけなの
だが。

いたって品行方正で常に沈着冷静。

端正な容姿を持ちながらも浮いた噂が一つもない。

真面目の代名詞のような一真。

その一真が、どうしてまとめて日誌などをつけているのか。

一真は隣の机についている小柄で少し丸い男を見る。

男の据わっている場所は窓の傍だった。

さわやかな風が吹きぬけ、暖かな日差しが入ってくる。

座っている男、大堀兵庫は帳面を凝視している。
おおほりひょうこ

その目にまぶたがどんどん降りていく……。

そして下まぶたと重なったと思った瞬間、カッと目を開けまた凝視
を始める。

「兵庫」

一真が声をかけようとした瞬間、頭の上から声がした。

「やい、兵庫、なんだその態度は。この俺と一真が働いているのは
誰のせいだと思ってるやがる」

見上げると、背の高い小奇麗な侍が柱に寄りかかって立っていた。
兵庫は声に吃驚して顔を上げたが、声の主を見て間の抜けた狸のよ
うな顔になった。

「安次郎か、脅かすなよ」

「驚かすな、じゃねえよ。お前が期日になってもやってなかったのだ、忘れてた」だの言うから、お前の分の帳面付けやら、日誌つけやら、上申書やら手伝ってんだぜ。そのお前が居眠りとは何たる情けなさ」

安次郎こと清島安次郎きよしまあんじろうは兵庫の頬をぐいっとつねり上げた。

「いひゃい、いひゃい」

兵庫がふにゆふにゆした言葉で痛いと訴える。

「目え覚めたか。このやろ」

安次郎が笑った。

「終わったぞ」

騒ぎの横で一真は黙々と日誌を書き続けていた。

「やった。かたじけない」

兵庫は日誌に飛びついた。

「お礼は、八百善でいいよ」

笑いもせずに一真が江戸ーの高級料亭の名前を言ったので兵庫は目を白黒させた。

「冗談だ」

無表情で一真が付け加えた。

こういうやつなんだ、と安次郎と兵庫は顔を見合わせて笑いあった。

そのとき、筆頭与力の中尾が一真に声をかけてきた。

「佐倉、岩木様の屋敷に行くように達しがあった。今からゆけるか」

「はい。大丈夫ですが、私一人ですか？」

「そうだ。岩木様がじきじきに話したいことがあるそうだ」

中尾は一真をじいつと見下ろした。

何でこんな奴がお偉いさんに呼ばれたのだろうか、という疑問の目だ。

「わかりました、行きましょう」
「真は立ち上がった。」

新米同心たちの受難 その二

岩木とは大旗本岩木左衛門尉善紀いわきざえもんのかみよしなりのことであり、江戸町奉行を務めている。

一方、一真は去年から勤め始めたばかりの御家人だ。

その身分は雲泥の差であり、上司の中尾が不思議に思うのも無理はない。

しかし、一真と岩木には大きなつながりがあった。

岩木は一真の実の叔父である。

岩木の妹は佐倉家に嫁ぎ一真の母となった。

故に佐倉の家は、御家人という低い身分ながらも岩木家とは親交が厚かった。

しかし、家同士の繋がりが重要であり身分違いの結婚などありえないこの江戸の御世でなぜ旗本の姫と御家人の父が結婚できたのか。それは一重に叔父の破天荒極まりない性格が絡んでいるに違いないと一真は思っている。

岩木左衛門尉善紀の屋敷は数ある旗本屋敷の中でも5本の指にはいる大きさだ。

「この屋敷に来るのは正月ぶりだな」

勤め始めてからは立場上、上司に当たることもあり意識して疎遠にしてきた。

幼い頃から正門から入る事が当たり前だったが、今は只の同心だ。身分の低いものとして裏口から入ろうと、裏手の木戸を開ける。

「どちら様？」

女中が来客に気づき近づいてきた。

しかし、一真を見るなり悲鳴をあげる。

「きゃああ、坊ちゃん」

「岩木様より呼ばれてきたのだが」

慌てて一真は弁明するのだが、女中は一真の体をぐいぐいと木戸の向こうに押しやった。

「こんな裏口から坊ちゃんを通してしまったら、私が首になってしまいます。なにとぞ、なにとぞ正門からお入りください」

屋敷側から女中が叫んだ。

「いや、私はもう勤めに出ており、ここから入るのが本来の常識でしょう」

一真はそういったが、既に女中は屋敷に触れ回りにいった後で返事はない。

仕方がなく正門に回る。

「一真坊ちゃん、お久しゅう」

門番がにこにこ声をかけてくる。

「もう坊ちゃんじゃありませんよ、唯の同心です」

正月にもそういったのに。

一真は顔には出さないが、少しふてくされていた。

「おお、一真坊ちゃん、すっかり一人前のお役人ですな」

家付きの家老の香月かづきが玄関に出てきた。

「ええ、新米役人です。香月様より身分は低いので坊ちゃんはやめていただけませんか」

一真はため息をついた。

客間に通されると、間髪いれずに女中たちがこぞって酒やら鯛やら運んでくる。

「坊ちゃん、肩衣姿がよう似合っておられて。真咲まひさ姫が見たら、どんなにお喜びになることでしょう」

酒を注ぎながら女中頭のお清が涙を拭いた。

真咲姫というのは、一真の母、真咲のことである。

「母が亡くなったのは去年の春です。ちゃんとこの姿も見てます。それからもう、坊ちゃんではなく同心になってるので、御家人らしく扱ってください」

「坊ちゃんは坊ちゃんですよ。他の旗本屋敷ではどうせ粗雑に扱われるんですから、せめてここでは、坊ちゃんらしくしていただくいな」

ここ以外の旗本には普通、新米同心は呼ばれません。

と、一真は心の中で思いながら、隅っこに置かれている茶に手を伸ばした。

やがて、女中頭も席をはずし、一真一人が客間に取り残された。

「岩木様、遅いな」

一真がそうつぶやいたとき、後ろに人の気配を感じた。

はっと振り返ると、6尺はあろうかという大柄な男が立っていた。思わず一真は身を翻し、逃げようとする。

しかし一呼吸早く男は一真を後ろから羽交い絞めにした。

太い腕で首を絞められ大声を上げられない。

男は低い声で笑った。

「ふふふ、久しぶりだなあ、一真。あいたかったぞお」

一真は首を絞めている腕を何とかほいて男に向かって言った。

「本日は何の御用だったのでしょうか、旗本岩木左衛門尉善紀様」

男は、からめている手足にさらに力を入れた。

「他人行儀な奴め。叔父貴と呼ばんか」

「いいえ、旗本岩木左衛門尉善紀様」

「強情なやつだ」

さらに、首を絞めなおす。

がっちりと締まった腕は今度は簡単には外れない。

吸う息、吐く息すらもままならなくなってくる。

たまらず一真も降参する。

「叔父貴殿・・・」

その言葉を聴いてニタツと満足げな笑みを浮かべた旗本岩木左衛門尉善紀は、上座にドカリと座った。

笑っている若く見えるがこの男45となる。

大猿のようなごつい男で、そのくせ中々の切れ者であって老中たちからも信頼が厚い。

一真は数回咳き込み呼吸を整えてから、叔父に向き合った。

「で、今日は何の御用でしょうか」

「うむ、わしのものになれ。後を継げ」

満足げに岩木が言う。

どこまでも破天荒な男だ。

一真は一真で眉一つ動かさずに

「お断りいたします。それでは、公務がございますので」

と席を立とうとした。

「いやちよつと待て。今のは冗談だ。まずあやめを呼ぶから」

あやめというのは一真の従姉妹である。

一真の一つ上で今年18歳となる。

これもまた変わっている女で、西洋医学に興味を持ち、女だてらに医者になることが夢らしい。

程なくあやめがやってきた。

「一真殿お久しぶり。あら、少し大きくなったかしら」

フフ、と艶めいた笑いを浮かべた。

父親とは血が繋がっていないと思わせるほどの妖艶な美人だ。

あやめが、一真を年下扱いするのはいつものことと一真がどうもと受け流す。

春というのに、濃青の着物に紫の帯を身につけ、おまけに異様な匂いが染み付いてる。

「また、医学の研究ですか」

一真が尋ねる。

「ええ。長崎から西洋の薬品が届きましたの。調合していたら面白くって」

ゴホンと岩木が咳払いをした。

「いけない。天照姫^{てんしょうぎ}、どうぞこちらへおいでください」

あやめがふすまの向こうに声をかけた。

ずっとふすまが開き、金糸の内掛けを着た少女が音も立てずに入ってくる。

「森津侯^{もりつこう}が姫、天照姫であらせる。この春公方様の側室におなりになった」

「はい？」

一真は思わず聞き返した。

状況が良く飲み込めない。

將軍の側室になった？

側室ならば大奥にいるべき人物がなぜこんな城下にいるのか？

「まあ話せば長くなるのだ。とにかく、側室であられる姫君がここにいることはまずいのだ。お前、姫を江戸城までお連れしろ」
腕組みをしてまさに名案とうなずきながら岩木は言った。

「はい？」

無表情だが、先ほどより強い口調で一真が聞き返す。

「なに、簡単なことだ。ばれないように江戸城まで籠で送るだけだ。途中見つかりそうになったらそいつを斬ればいい。大丈夫、お前の刀の腕は江戸一だ。わしが保障する」

ひじ置きにもたれかかりながら、軽く言う。

論点がずれているうえに中身は相当難儀なものだ。

くらくらする頭を抱えながら一真は岩木に言った。

「ここから江戸城、一番近い北跳橋門でも軽く半里はありますよ。それにばれたらお家取り潰しは免れません。かといって目撃者を斬って終わりというわけにはいかないでしょう。それに、運よく江戸城までいけたとしてもそこから大奥のある本丸まではどうするおつもりですか」

「中のことは大丈夫だ。わしの息のかかったものに手筈をつけておる。北跳橋門の番人には既に伝え済みだ。その後は庭番衆がお連れするようになっておる。それに万が一城下でいざこざがあってもわしが治めてやるから」

な、本当に、本当に簡単なことだと、岩木は念を押した。

一真はそれでも叔父の言うことを信用しない。

こんな変人だが頭は切れる。
何の打算もなく一真を使うはずがない。

新米同心たちの受難 その三

なおも一真が疑いのまなざしを向けていると、突然天照姫がわつと泣き出した。

「おお、おいたわしや、姫君。はよう城にお戻りになりたいのでしょう。大丈夫、ここに在一真殿は、能面の男という通り名がある程、無表情ではございますが情には厚い男でございます。必ずや姫君を安全迅速にお城までお連れいたしますよう」

泣き崩れる姫君を胸で抱きとめたあやめがいった。
そして、そのままじろりと一真をにらむ。

女の泣くのは、さしもの一真もあまり得意ではない。

一真は目をつぶり考えていたがついに折れた。

「分かりました。門の前までお連れすればいい、それだけですよね。承知いたします。しかしそれには友人の大堀兵庫、清島安次郎も一緒につけていただいてもよいでしょうか」

「おお、清島安次郎か。あいつも刀の腕は有名だからな。好都合だがはは、と豪快に笑い、手配のために出て行った。

共に天照姫も部屋へと下がっていく。

残された一真は、あやめに尋ねた。

「一体どういことなのですか」

「さあ、私に聞かれても。私も何も聞かされていませんもの。でも父の懇意にしている老中阿部様の派閥が絡んでいることには間違い

はないと思いますわ。天照姫は3日前に我が家にいらしたんです。何でもお命を狙われているとかで。もし、お命を狙うとしたら正秀院様の派閥かもしれませんわね」

正秀院とは前將軍の正室だ。

表向きには隠居の身だが実権はまだ健在だ。

「表に意見することも多くて、阿部様とは日ごろから折り合いが悪いと噂があります。そのからみだしたら、正秀院派のお家には特に気をつけたほうがいいですね」
あやめもうなずいた。

やがて、大堀兵庫と清島安次郎が岩木の屋敷にやってきた。

「ひゃあ、おれ、こんなお屋敷に上られるなんて思ってたよ」

兵庫が出された菓子と茶をほおばりながらきよろきよろと見回す。

「お前が岩木様と親戚つてのは知ってたけど、やっぱすげえや、岩木屋敷」

安次郎まで感嘆のため息をついた。

「で、何のために呼ばれたんだ。俺たち」

小首をかしげ兵庫が一真に尋ねた。

「それはそのうちわかるよ」

何も知らない二人の呑気な姿を見ると哀れな気持ちになった。

「失礼いたします」

再びあやめが入ってきた。

二人がその美しさに見惚れる。

「岩木様の一人娘、あやめ姫だ」

一真が従姉妹を紹介する。

「いや、まさか旗本の姫君が客間にまでご挨拶にこられるとは・・・

」
安次郎が姿勢を正す。

安次郎は一真とは対象に女好きである。

役者のような美男子であり、おまけに母親の実家が大きな呉服問屋で金回りもよい。

よってよく弄てる。

そのせいもあってか女を見ると声をかけずにはおれない性質なのだ。今度もその病がでた、と一真たちはやれやれと思った。

「美しい。このように美しい方と出会えてこの時この場所に生まれてきてよかったとつくづく思います」

「ホホホ、お上手なこと。その甲斐性が一真殿にもあればいいのに」
あやめが笑う。

「でも、この仕事をお引き受けされるだなんて、度胸があたりですのね」

あやめが付け加えたその言葉に安次郎がきよんとする。

「そろそろ、準備が整ったようですね」

あやめが気ぜわしくなった廊下を見ていった。

そして、現れた姫君をみて、二人は目を見張る。

「將軍様の御側室、天照姫であらせます。お三人でしっかり警護く

「ださいましね」

悪びれる様子もなくつらつらと答えるあやめをよそに、兵庫と安次郎はただただ一真の背中を絶句しながら見るのであった。

「お前、謀ったな」

庭先に一真を引っ張り出した二人は一真に食って掛かる。

「何で御側室が城下にいるんだよ、どうして俺たちが江戸城まで警護しなくてはいけないんだよ、こんなことばれたらお家取り潰しじやすまないぞ」

安次郎が声を荒げる。

「叔父貴殿は多分、剣の腕があつて調べても足のつきにくそうな御家人を御所網なんだよ」

ため息混じりに一真が言った。

「腕が立つなら、一真と安次郎だけでいいじゃないか。俺は関係ないぞ。俺、弱いぞ」

半泣きになりながら、兵庫が弱さを強調する。

横目でその様子を見て一真は奥の手を出した。

「褒美に金一封を出すそうだ」

貧乏長屋暮らし兵庫の喉が、んぐつと唸った。

また、安次郎にも向かつていった。

「仕事が終わったら、吉原で松風を呼んで打ち上げるそうだ」

東西一の花魁の名前を出されて安次郎も目の色が変わる。

「仕方がないな。まあ、ここに姫がいることは辺りに知れていないのだから、半里程度なら何事もないだろう。おい、兵庫、足手まといにならないようにしっかりとついでこいよ」

安次郎が拳で手を打つ。

兵庫もしぶしぶうなずいた。

一真は、単純明快な友人たちでつくづく良かったと胸をなでおろすのであった。

出立の時間となり、姫君は用意された輿に乗った。

姫君が乗るには少し粗末で地味な輿だが、しっかりと御簾がついて
いるため中は見えない。

日雇いの駕籠かきが2人、事情はもちろん知らされていない。

そして、護衛は、一真たち新米同心3名のみ。

何とも心もとない半里の始まりであった。

第二幕 約2キロの長い長い道 その一

輿はつつがなく歩を進める。

途中幾度かの曲がり道を曲がると比較的人通りの多い大きな道に出た。

人目があると幾分気が緩む。

「姫、ご気分は悪くございませんか？」

籠酔いをしていないか一真が気遣った。

「大丈夫じゃ。お気遣いかたじけのうございます」

籠の中から思いのほか幼い声が返ってきた。

姫君は14歳、元服の儀も結婚に先だって行われたばかりの少女だ。

そんな姫君が、命を狙われて大奥の規律を違反し、今、城下にいる。恐ろしくはないのだろうか？

「恐ろしくはありませんか？」

姫が突然言った。

一真が思っていた言葉を姫にそのまま口に出されて、一真は考えを見透かされたようにドキツとした。

「あの、そなた達も若いようなので。このような護衛はしたことがないのじゃろう」

姫が言葉を継ぎ足す。

「心細いですか？」

「そのようなことは・・・」

そういったまま口ごもってしまった。

心配なんだな。

一真はちよつと傷ついた。

安次郎が、軽く声をかける。

「大丈夫ですよ。俺たち、剣の腕は立つんです。特に一真は、剣聖武蔵やら柳生宗厳やらの生まれ変わりとも言われるくらい強い。姫君が案ずることは何もないです」

姫君がフフ、と笑う声が聞こえた。
少し安心してくれたらしい。

安次郎が続ける。

「ここにいる狸みたいな顔の男も、剣こそ駄目だが、いざって時の悪知恵はすごいですよ。大船に乗ったつもりで、どうぞ籠旅をお楽しみください」

「狸い？おい、悪知恵ってなんだ、せめて賢い、ってぐりにしろよ」

兵庫が自分のことを言われてぶうつと膨れる。

「賢くはないからな」

一真が真顔で言う。

姫君は大層おかしそうに笑う。

「うらやましい」

ひとしきり笑った後、姫が言った。

「そなたたちは何でも言い合える仲なのじゃな。わらわたちもそうありたいものじゃ」

独り言のようにつぶやいた。

半分を過ぎた。江戸城まで後2町もない。
もう少しまでこの籠旅も終わる。

やがて、また人通りの少ない細い道に出た。

一行の行く先から、別の籠が来る。

遠目からにも立派な籠である。

籠の屋根に家紋が入っていた。

「まずいな。下府中様しもふちゅうの籠だ」

下府中藩は正秀院の実家だ。

現在は正秀院の弟が藩主である。

籠の雅な様子から藩主が乗っていることには間違いない。

もし、正秀院が首謀者ならば、実家には真っ先に頼るだろう。

また、城の方面からやってくる籠はそれを裏付けるものではないだろうか。

「止まってやり過ごすぞ」

姫が乗っていることを悟られてはならない。

一真たちは籠を止め、深々と一礼をしてやり過ごす。

その時、一真は自分の横にある籠が一瞬動いた気がして、横を見た。
それと同時に、下府中侯の籠が歩みを止める。

「な、なんで・・・」

この言葉を発したのは、下府中侯なのか、それとも一真たちなのか。
金縛りにあったように全員動けない。

「姫」

やっとのことで一真が言葉を発した。

金系の内掛けを羽織った少女が、御自らの足で道の真ん中に立っていた。

約2キロの長い長い道 その二

姫君のまだ幼い顔に恐怖と怒りが入り混じる。

「森津侯が長女、天照じゃ」

先ほどまでの笑っていた声とは声調が違う。
どこか決心を伺わせる深い声色だった。

「馬鹿っ」

一真は聞こえないくらいの小さな声でつぶやき姫の前へと躍り出た。
同時に時が動き出したかのように皆、一斉に動き出す。

「てっ、天照姫じゃ、斬れ、斬れ！」

籠から下府中侯が転げるように降り立つと、家臣たちに命じた。
傍にいた侍たちが一斉に切りかかってくる。

一真と安次郎が姫を背にしてほぼ同時に刀を抜いた。

「計画失敗だ。兵庫、姫を連れて逃げろ！」

一真が後にいる兵庫に言った。

「に、逃げるってどこへ」

籠かきは既に逃げ出し、籠は使えない。

「どこでも！ここは俺たちが食いとめる」

安次郎がこたえた。

「ひえっ」

兵庫は半べそをかきながら天照姫の手を引いた。

残された一真と安次郎は細い道をふさぐように2人で立つ。

「なるべく斬るな」

一真が言った。

「いや、無理でしょ。この人数」

片頬を上げて安次郎が答えた。

「とにかく時間稼ぎだけだ。その後、俺たちも逃げるぞ」

「合点」

言うや否や、安次郎が侍の群れに突っ込んでいった。

無数の刀が安次郎に襲い掛かる。

安次郎は紙一重でそれらを避け、同時に打ち返す。

その顔には余裕の笑みすら浮かんでいる。

反射神経の良い安次郎は一对一の斬り合いより、避けながら打ち返すという大人数を相手にするやり方が好きなのだ。

かがんだかと思うと、ばねのように跳ね上がり、相手の刀を落とす。後に回ったかと思うとまた前へくると回り、肩を突く。

相手が攻撃するに任せてまるでくると踊るような剣捌きだ。

その様子を横目で見ながら、一真は数人の侍に囲まれていた。

一真は通りの壁を背にして一つ息を深く吐いた。

その様子を侍たちは、覚悟を決めたと思ったらしい。

「餓鬼が。粹がるからだ」

一人が上段に構え一真に振り下ろそうとした刹那。

一真が睨んだ。

その目の色は深く、情をもたない冷たい光を放つ。

睨まれた侍は背筋が凍るのを感じた。

一真が刀を下に構えた。

上級者のよく使う下段の構え、しかしそれ以上の凄みがある。空気が青く冷えていく。

それは、他の侍たちにもやがて伝染していく。

一真が一步前に出た。

思わず、侍たちは後ずさりをした。

殺気。

侍たちはこの言葉にいたるまで随分時間をかけた。

追い詰めているのは自分達だというのに、まるで猫に追い詰められたねずみのような気持ちになっている。

「うわあ！」

一人がたまらず一真に切りかかった。

がむしゃらに突っ込んできた刀は一真にひらりと避けられた。

避けると同時に一真も反撃にでる。

一瞬むき出した青白い闘志は、侍の腕を襲う。

刹那、刀はくるりと裏返されその峰で侍の刀を叩き落した。

「ひっ」

有り余る殺気にやられ刀も奪われてしまった侍は、戦意を失い一真から逃げ出した。

誰もが金縛りに会ったように動けなかった。

先ほどから上段に構えて動けなかった男が突っ込んできた。

一真はすっと避けると刀の柄で首を叩いた。

男はそのまま伸びてしまった。

侍たちがじりじりと後退し始める。

一真はそろそろ引き上げ時だと感じた。
兵庫たちとは随分離れたはずである。

一真は安次郎に声をかける。

「いくぞっ」

安次郎が退路を背に、一真に近寄る。
そして二人同時に走り出す。

「殺したか？」

走りながら、一真が尋ねる。

侍同士の喧嘩は法度である。
ましてや殺してしまったらいくら権力のある岩木でも面倒見切れないかもしれない。

「怪我はしただろうけど、急所はずしたつもりだ。それより、兵庫は大丈夫だろうか。できるだけ足止めはしたけど、多分何人かは追ってるんじゃないかな」

安次郎が不安をこめて答えた。

「あいつは馬鹿じゃない。いざというときの悪知恵に期待しよう」
一真はそう答える。

走りながら心の中で岩木に悪態をついていた。
あの大猿め、大丈夫だと言いながら、肝心の姫君が敵の前に顔を出すなんてどうしようもないではないか。

それに下府中侯。

天照姫とわかると、迷わず斬りに来た。

いくら姫が城下にいるとはいえ、普通側室をそのまま斬りに来るか？

何か隠している重要なことがあるはずだ。

一真たちは侍たちが追ってこないことを確認すると、その足で岩木の屋敷に向かった。

約2キロの長い長い道 その三

一方、兵庫は必死で姫の手を引いて逃げる。

一真と安次郎が抑え切れなかった侍が兵庫達を追っていた。

土地勘はあるので迷いはしないが、城からも岩木屋敷からもかけ離れた方向に走っていることはわかる。

逃げる当てもなく、捕まることは時間の問題だった。

おまけに兵庫は女連れ、それも派手な着物を着た姫君だ。

これでは目立ちすぎる。

兵庫は近くの茶屋に飛び込んだ。

「ひ、姫君、大丈夫でございますか？」

ぜえぜえと息を切らしながら兵庫が聞いた。

「わらわは大丈夫です。それより兵庫殿こそ大丈夫でありますか？随分と息が切れておりますぞ」

天照姫は茶屋が珍しいらしくきよろきよと見回す。

しかしここも長居はできない。

「ご無礼を承知でいいいます。どうか、どうかその目立つ打掛けをここでお預けください。必ず後から取りにこさせますので」

拝むように姫の前で手を合わせる。

姫は少し困ったような顔をした。

「これを脱げば姫と分かつるか？」

ぼつりとつぶやいた。

兵庫は言葉の意味が分からない。

少なくともこの状況では姫と分からないほうがいいに決まっている。

「まあよい。確かに打掛けは動きにくうてしょうがない。兵庫殿どうぞお願いいたしまする」

姫君が打掛けを脱ごうとしたとき、いたぞ、という声が外から聞こえた。

「まずい、追っ手だあ。逃げますぞ」

兵庫は再び姫の手を取り茶屋の裏口から逃げ出した。

やがて行く先に橋が見えてきた。

来る途中にこんな堀はなかったので、相当違う方向に向かっているようだ。

「いよいよまずいな」

そう思いながら堀の中を見ると一艘の舟が橋の下を通過しようとしている。

その船の屋号を見て、兵庫の顔に希望の笑みが浮かんだ。

「姫、再びご無礼をいたします。御免」

そういうと兵庫は姫の体を抱え上げ走った。

「いたぞ、こっちだ」

兵庫は追っ手達に見つかった。

兵庫は橋の真ん中にたたずむと、深呼吸をして橋から飛び降りた。その後、ドボオンと派手な音が響いた。

大きな水柱が上がる。

追っ手達は慌てて堀を覗き込む。

波紋がいくつもできた後、水面は再び平らになる。しかし、浮かび上がってくるものは何もない。

追っ手達はしばらくその様を見ていたが、やがて元の道を引き返していった。

あるいは姫が死んだと思ったのかもしれない。

その橋の下で一艘の舟が潜むように留まっている。

「と、とにかく助かった・・・」

兵庫は舟のへりにぶら下がり安堵のため息をついた。

「だいじょうぶですかい？」

心配そうに船頭が声をかける。

兵庫が見つけた舟は、安次郎の母の実家の呉服問屋のものだったのだ。

本店は日本橋にあるのだが、最近古着の扱いも始めてその買い付けに江戸中を駆け回っている。

その際に活用したのが水路である。

堀や運河の多い江戸では陸路で大八車を使うより舟で運んだほうが楽に遠くへ買い付けができる。

偶然にも買い付け帰りの舟を見つけたのだ。

乗っていた手代が安次郎の友人である兵庫の顔を覚えていてくれたことも運がよかった。

事情も話さないまま姫を船に飛び乗らせ古着の中にもぐりこませた。その後、兵庫は再び橋の上に行き、追っ手が来るのを待つて飛び込んだ。

もぐったまま舟に近づき顔を出す。

そのまま影で息を潜め追っ手が去るのをじっと待った。

追っ手をまくための兵庫の作戦は見事当たった。

「どうしますかい。あたしら日本橋に帰るところだったんですが、よかつたら家の近くの堀までおくりましようかい」

手代がありがたい申し出をしてくれて一旦岩木の屋敷に戻ることにした。

兵庫は安次郎に心の中で手を合わせた。

日はだいぶ傾き、江戸の町に長い影を作る。

「明日になればまた挑戦できますよ」

慰めるつもりで兵庫は言ったが、姫は首を振った。

「明日じゃ遅いかもしれぬ」

姫の目は江戸城のほうをずっと向いていた。

屋敷には安次郎と一真が既に戻っていた。

戻ってきて二人を見た兵庫は緊張の糸が解けたのと同時にむらむらと怒りがこみ上げてきた。

「安次郎、お前どういうことだよ。お前の母御様の実家の舟に助けてもらったはいいが、そこまで送ってもらうのに渡し賃取られたぜ。しかも一分。一分も」

人差し指を突っ立てて安次郎に噛み付いた。

「向こうも商いだからしかたないさ。まあ、それで助かったんだからいいじゃないか」

それにしても商魂たくましいなあと感心しながら安次郎がいった。

「姫、よくぞご無事で。さあ、奥へどうぞ」

あやめが出てきて姫を奥へといざなった。

「ったく。わざわざ敵方に顔を見せるなんてどういうことだよ」
安次郎がため息をついた。

兵庫は江戸城をみる悲しげな顔が忘れられなかった。

「なあ、姫君はどうしても江戸城に帰りたい様子だった。あの打掛けにも思い入れがあるようだったし」

兵庫の言葉に一真もうなずいた。

「俺たちも、岩木様にもう一度確認をしようと思った。第一側室が一人で外にいるというのになぜ騒ぎにならないのか、それも不思議だ」

約2キロの長い長い道 その四

計画の失敗で岩木は対応に追われ、岩木が一真達に事情を話ができたのは夜も更けてからだった。

「悪かった、こんなことになるとはな。お前たちが睨んでいるとおりこの件には正秀院様が絡んでおる」

天照姫の実家、森津藩は親藩大名であり老中阿部とも大きな繋がりがあつた。

今回姫が側室として入ったことも老中が斡旋したためだ。

これにより老中派はより勢力を持つことができる。

一方、正秀院はこれ以上老中に勢力を持たせれば自分の進言が取り入れられない恐れがある。

それどころか、まだ若く幼いとはいえ側室として大奥に老中の息のかかったものが入るのだ。

子供、それも男の子でも産まれてしまえば、大奥での実権もなくなるかもしれない。

正秀院は、自分の弟である下府中侯に天照姫の暗殺を命じた。

それは老中子飼いの庭番衆が確認をしている。

しかし、もしこれが表ざたになれば正秀院の権威は失墜するであろう。

老中派は逆に絶好の機会だと考えた。

それには暗殺の証拠がある。

唯の憶測で正秀院を捕らえてしまつては、正秀院派の大名が黙っていないだろう。

老中派は証拠を掴み、なおかつ姫を守る案を練る。

その過程で森津藩の事情を知る者からこんな意見が出された。

実は、森津侯の国元には、双子として生まれた子供は先に生まれたほうのみ育てるといふ風習があるのだ。

幸か不幸か天照姫は双子の姉として生まれてきた。

妹姫は本来なら忌み子として捨てられる。

しかしそれはあまりにも惨いとして下屋敷の一室でひっそりと育てられていたのだ。

その姫の名前は月詠姫といった。

届けも出されず、ただ屋敷の角で少しの人間だけが知る存在。

今回、その瓜二つの月詠姫を天照姫の身替わりとしてわざと敵方に襲わせて、そこから証拠を割り出すという方法はどうか。

岩木をはじめとする複数の大名や旗本から反対が起こった。

途中でばれてしまえば天照姫が公に処分されることは間違いない。ましてや、人を犠牲にして政敵を討つなど人の道から外れている。

しかし肝心の森津侯がそれを許可してしまったのだ。

「もし、その方法で内政が巧くいくのであれば止むを得まいと思う。天照も月詠もわかつてくれる」

忌み子とはいえ隠してまで大切に育てた子供である。その子の命と引き換えに政敵をおとし入れる。

森津侯にとって断腸の思いに違いないだろうがあまりにも無慈悲である。

岩木は天照姫を預かる役を買って出た。

万が一、天照姫自身がこの計画に反対すれば、暗殺阻止を重視する方向でいたのだ。

大奥で天照姫と月詠姫が入れ替わることはたやすかった。

まず衣装箱を天照姫への森津侯からの差し入れと称して持ち込む。その中には月詠姫が潜んでおり、天照姫の部屋の中で二人は入れ替わる。

月詠姫は天照姫の衣装を着て、天照姫は襦袢のみとなり、衣装箱に潜む。

姫の入っている衣装箱は森津侯に返却をするということにして江戸城の外に出し、そのまま岩木屋敷に向かう。

これにより、誰にも怪しまれることなく外に出ることができたのである。

岩木は面倒を見ながら様子を探った。

時がたつにつれて月詠姫を気にかけている様子を見せ始める。

「月詠姫がわらわの身代わりになることはやはり不憫でなりませぬ。どうか岩木殿、助けてやってはくれませぬか」

昨晚ついに天照姫が岩木に願い出た。

計画を中止するならばいつまでも隠すわけには行かない。

岩木は天照姫を大奥に一旦戻すことにした。

正秀院の尻尾は後でつかむつもりで、とりあえずは暗殺だけでも阻止できるように庭番衆の手配も促した。

後は、姫を運ぶ役だけである。
旗本や大名だと目立ちすぎる。

目立たない御家人がいい。

甥っ子の一真は刀の腕が立つし、機転も利く。
襲われたとしても死ぬことはないだろう。

そう思い、奉行所に使いをだしたのであった。

三人はようやく納得がいった。

「下府中侯が実行犯。それで城にいるはずの姫を見て驚いてしまい、思わず斬りかけてきたってわけか」

「大奥が騒ぎになってないのはそっくりの身代わりがいることで、姫はその身を案じている。籠から出た理由は、月詠姫の命を永らえたくて混乱させたかったのか」

「それはわかるけど、打掛けにはなにがあるのさ」
3人は考え込む。

その時、母屋で悲鳴が聞こえた。

「曲者つ。誰かあ！」

聞き覚えのある声だった。

「あやめ殿の声だ！」

一真が叫んだ。

一真達はあやめのいる母屋へ一斉に駆け出した。

第三幕 侵入者 その一

母屋に駆けつけた一真達は廊下にあやめが倒れている姿を見た。

「あやめ殿、大丈夫か」

一真が抱き起こす。

「姫。天照姫は」

痛みに顔をゆがめながらあやめが姫を案じた。

「今、叔父貴殿が確認している。それよりどこを斬られた」

あやめを抱える腕に力が入る。

一真は母が死んだときを思い出した。

不安が頭の中をよぎる。

しかしあやめは一真の手を払い、体に力をこめて起き上がる。

「私は大丈夫です。まだ勉強途中とはいえ医者ですもの。こんなことでは死にません」

額に玉のような汗を浮かべながらも、強いまなざしで無理やり笑う。

「それより曲者を早く捕まえなければ。私が部屋で書き物をしていたら中庭で物音がしましたの。不審に思っ外に出たら、黒装束の男たちが屋敷を探っておりまして。私がそれを見て声を上げたら一人に斬られて、男たちはそのまま姫の部屋の方面に走っていったしまいましたの」

うつと呻いて肩口をかばう。
真っ赤な血が着物に滲んでいた。

「姫様っ」

一真達より一足遅れて女中頭のお清達が駆けつけた。
早々にあやめの手当てを始める。

幸い致命傷は免れているようだった。

「後は頼む」

お清に告げると一真達は姫君の部屋に向かった。

岩木は姫の部屋の前にいた。

「姫は無事ですか」

「無事だ。あやめが叫んだおかげですぐに非難できたそうだ」
岩木が大きくうなずき一真は胸をなでおろした。

「あやめは」

岩木が神妙な面持ちで聞く。

「肩を切られておりました。ですが、大事ないと思われます。今お清殿が手当てをしております」

「そうか」

岩木は安堵の表情を浮かべた。

「あやめ殿の話だと曲者はこちらに逃げたとのこと。まだ屋敷内に

いるかもしれません」

「そう思って、全ての門を閉めさせた。今、家臣達を総動員して探させているところだ。のこのこわしの屋敷に忍び込むとはな。絶対に逃がさんぞ」

そういつて拳と拳をぶつけた。

娘を斬られた怒りと忍び込まれた怒りが合わさって、岩木は鬼の形相になっていた。

間もなく3人の男を捕らえたとの報告が入った。

「座敷牢なぞもつたいないわ。馬小屋につないでおけ」

岩木は声を荒げ、家臣に命じた。

「岩木様、こえくな」

安次郎と兵庫はすっかり縮こまってしまった。

「これからもつと怖いぞ。叔父貴殿があんなに怒っているのは久しぶりだ」

無表情で一真はいった。

馬小屋に繋がれた3人の男は馬の後ろに座らされていた。

馬の蹴る力は恐ろしく強い。

当たり所が悪ければ一蹴りで命を落とす。

それでさえ恐ろしいのに、目前では拷問の準備が着々と進んでいる。

たいまつがたかれ、大量の水と油が用意される。

鞭、木刀、金棒も続々集まる。

刀が何本も研がれていく。

そこへ、岩木が鬼の形相で現れた。

たいまつのも明かりが岩木の険しい顔を余計に際立たせる。

すぐ後から一真、そして安次郎と兵庫もついてくる。

「お前たち戻ってもいいぞ」

岩木が新米同心たちに言った。

これから始まる拷問は若者には残虐すぎると考えたのかもしれない。

兵庫が上目遣いに一真を見た。

戻ろう、と目で合図を送る。

しかし一真は一步前に出る。

「俺も一発殴つてやりたい気持ちでいっぱいです」

顔にこそ出ていないが、あやめを斬られた怒りで爆発寸前だった。

涙目になりながら兵庫が安次郎を見た。

安次郎は緊張した面持ちだがまっすぐ一真達を見ている。

一人だけ戻れる雰囲気でもない。

仕方なく兵庫は耳をふさぎ後ろを向いた。

馬小屋の前で巨漢の岩木が仁王立ちになる。

家臣の一人が木刀を手渡した。

すうつと音も立てずに木刀を天に掲げた刹那、力を込めて地面に叩きつけた。

バキィツと派手な音をたてて木刀が折れた。

「ひい」

縛られた男達から小さな悲鳴が漏れた。

「この岩木左衛門尉善紀の屋敷に忍び込むとは随分といい度胸をしておるな。その度胸を買ってやろう。このわしが直々にお前らを尋問してやる。よいか、しゃべることなくして生きて帰れると思うなよ。3人もおるんじや。2人位は畑の肥やしにしても差し支えない」

凄みのある笑顔を浮かべた。

「真っ先にしゃべったものだけは生かすことにする」

岩木に気おされた3人の男たちはこれを聞いて我先にとしゃべり出した。

「し、下府中様が」

「このお屋敷にいますと、姫がひそんでいます」

「わしら、仕方がなかったんじやあ、金を出すといわれて」

「これ以上のことは聞かされておらぬ、本当じや、信じてくれ」

「ど、どうか命だけは！」

「お慈悲を」

涙と鼻水でぐしょぐしょになりながら、下府中侯の悪事と命乞いを

口々にする。

「あやめを斬ったのはどいつだ」

岩木が問う。

真ん中の男を他の二人が見た。

「お前か」

言っなり刀を抜いて肩口を切りつけた。

ぎゃあ、と言う叫び声とともに血が飛び散った。

男は転がりながら呻く。

筋まで切られたようで、だらりと右腕が伸びている。

岩木は血のついた刀を家臣に渡した。

「後始末はまかせたぞ」

家臣に言いつけ岩木は屋敷へと身を翻した。

一真達もその後続く。

侵入者 その二

「あの様子だと、何も知らないようですね
一真は言った。

「しかし、姫がここにいることを何故知ったのでしょうか。私たちは後をつけられていないと思っていましたが」
安次郎がいい、兵庫もうなずいた。

「駕籠かきは調べても1、2日はかかるくらい脚がつかないような奴を雇った。その線からも薄いはずだ」
岩木は腕を組み、考え込んだ。

「城で身代わりがばれたのではないでしょう。誰かが情報を流したと思います」

一番納得がいくのはやはり情報が漏れている線である。

おそらく下府中侯は姫と遭遇した後、正秀院に確認したはずだ。
しかし城内に姫はいた。

そうなれば江戸城にいるほうが本物で、城下にいるほうは偽者と思うだろう。

双子という事情を知らなければ瓜二つの姫を見て疑いを持つことはない。

けれど、もし敵に双子ということがばれてしまえば話は変わってくる。

城下にいるほうが天照姫ということは十分ありえる。
敵方はそう考えるだろう。

しかもそれが岩木屋敷にすることが分かれれば間違いなく討ちに来る。
大奥で殺すよりも、表沙汰にできない場所で殺したほうが始末は楽だからだ。

岩木は眉間にしわを寄せ考えていた。

老中派の仲間を疑ってみているようだが、疑わしい人物が浮かび上がってこない様子だ。

その時、ふすまが開き天照姫が入ってきた。

「ご無理を承知で申します。今から城へ連れて行つてはもらえまいか」

「今からですと？確かに夜のほうが人に見られず動きやすいですが、それにしても急すぎて城内まで根回しがきくかどうか」
岩木が眉を寄せた。

一真はふつと気づいた。

「月詠姫が危ない。そうなんです」

天照姫は涙を浮かべてうなずいた。

「そうか、天照姫を殺したとしても、身代わりがそのまま天照姫と

して生きていれば意味がない。殺すなら二人とも殺さない」と
安次郎がひざを叩いた。

岩木は立ち上がった。

「わしは今から老中と打ち合わせてくる。しかしそれをまっつていては遅い。いや、今からでも遅いかも知れぬ。とにかく城内にどんな形でもいいから入って月詠姫を守れ。後の始末はわしがする」

一真達は姫を連れ、夜の道を走った。

半里の道は恐ろしく長く感じられたが、夜更けということもあり、誰からも見られることなく城の橋までたどり着いた。

門の前には老年の番人がいた。

曲がり角に潜み、様子を伺いながら安次郎が言った。

「事情を知っている昼間の門番とはとくに交代しているだろうな」

「こんばんわつていつでも入れてもらえないよなあ」
兵庫がため息をついた。

「恨みはないが、少しの間気絶してもらうか」
一真がいった。

「これを着ろよ。さっきの男達の黒装束を借りてきた。顔を見られないほうが岩木様も都合いいでしょ」
兵庫が黒装束を取り出した。

侵入者 その三

黒装束をまとった一真達は門番の口をふさいで当身をする。
門番は驚く暇もなくくたつと倒れこんだ。

3人は橋の欄干にそつと寄りかからせた。

中の様子を門の隙間から伺う。

見張りは思ったより少ない。
思いの他、簡単に忍び込むことができた。

壁伝いに奥へ進んでいくと、目の前に本丸が見えてくる。

本丸は大きな壁に囲まれており、入り口は表側には多くあるが、大奥側には勝手口のみ。

大奥に入るには壁をよじ登り、中に入るしかなさそうだった。

登りやすそうなところを探していると兵庫が黙ったまま指を刺した。

見ると、中に向かって縄梯子がのびている。

「先客がいそうだな」

一真が小声でつぶやいた。

一真が登ってあたりを見渡す。

辺りは静寂そのもので、騒ぎになっている様子もない。

月明かりは大奥を明るく照らす。
その下に動く影はない。

人がいないことを確認すると下にいる3人に合図を送る。

全員登り切った後、姫に部屋の位置を声を潜めて尋ねた。

「まさにこの辺りじゃ。のう、一真殿。ここに梯子があるというこ
とは・・・」

「ええ、月詠姫の部屋に忍び込んでいるということでしょうね。急
ぎましょう」

かけっぱなしにしたままであることから、まだ中に潜んでいる可能
性が高い。

壁を越え、外庭に面しているという姫の部屋を探す。
姫が足を止め、一つの部屋を指差した。

「あの部屋じゃ。あの丸い窓のある」

一真と安次郎が部屋に近づき様子を探る。

中から幼さの残る女の声がした。

「話が違うではないか。何故、こんな。あつ」

言葉が途中で切れて大きな物音がした。

二人は障子を開けて部屋に乗り込んだ。

中には、同じく黒装束の男が4人ほどいた。

その中央に少女が今にも斬られそうな様子で床に押さえつけられていた。

「何だ、お前ら」

一真達を見た男たちが手を止めた。

「味方ではないさ」

安次郎がそういい突っかかっていった。

一真もその後ろに続く。

狭い室内で刀を振り回すのはあまり効率が良くない。

もつともそれは相手も同じだ。

思うように刀が振れない安次郎は一旦下がし、敵を庭へとおびき出す。

男たちも安次郎を追い、外に出た。

しかし、外に出た瞬間、安次郎の刀は息を吹き返す。

安次郎が相手をしている男は2人。

ちろちろと剣先を動かして、安次郎は相手の出方を見る。

一人が左から切りかかる。

もう一人も半歩遅れて右から切りかかる。

安次郎は一方の男の刀を避けると男の体の横にまわりその体を盾とし、もう一人の男に斬りつけた。

同時に盾となった男の体を思い切り押し倒す。
さらに上から当身をして、気絶させた。

「殺したら証拠にならないもんな」

そついうと男の覆面をはずした。
それを紐のように切り裂き縛り上げていく。

一方一真は、室内に籠ったままであった。

左腕で月詠姫をかばいながら二人の男を相手にしている。

一真は男たちに問う。

「誰の差し金だ。なぜ姫を狙う」

「ここにるのが天照姫だろうと月詠姫だろうと生きていられては困るんだよ」

言い終わるか終わらないかのうちに、一真に討ちかかってきた。

一真はそれを刀で受け止めると、そのまま相手の刀の根元まで滑らせる。

刀身から火花が飛び散った。

刹那、一真が刀身を傾け、相手の刀を飛ばした。

刀は壁に深く刺さった。

一真は刀をなくした相手にすばやく峰打ちを食らわせる。

直後もう一人が切りかかってくる。

2、3度打ち合ったあと、しばらく睨みあう。

男が切り込んできた。

一真は胸が開いたのを見逃さなかった。

刀を裏に返して峰で思い切り打ち込む。

ぼきつと鈍い音がして男が崩れこむ。

「終わったな」

涼しい顔をして一真がつぶやいた。

第四幕 天照姫と月詠姫 その一

部屋の中がしんと静まり返った。

「月詠っ」

天照姫が部屋に駆け込む。

先ほどまで行われていた斬り合いにまだ震えていた月詠姫であったが、天照姫の顔を見るとみるみる涙が溢れ出した。

しかし、その顔には悔しさと悲しさがにじんでいる。

「なぜ、生きておる。私が、私が正秀院に密告したというのに」

月詠姫はそういうと畳に突っ伏して、わあわあと泣き崩れた。

天照姫は息を呑んだ。

「い、今なんと申した」

「密告者は月詠姫だったのか」

安次郎と兵庫も天照姫の後から部屋の中へ入ってきた。

天照姫は真っ青になりながら月詠姫に声を荒げた。

「何故、そのようなことをしたのじゃ。愚か者っ。そなたのせいで皆にどれだけ迷惑をかけたか、わかっておるのか」

月詠姫が顔を上げ、天照姫に言った。

「うらやましかつたのじゃ、妬ましかつたのじゃ。そなたばかりが日なたを歩くのが。わらわはいつも、いつも屋敷の隅でいないものとして扱われて！」

月詠姫は泣き続ける。

天照姫は、月詠姫を見下ろし立ち竦んだ。

その言葉に動揺し、かける言葉を見失っているようだった。

やがて月詠姫は顔を上げて涙を拭いた。

ポツリとつぶやく。

「けれど、それも仕方のないこととあきらめておつたのじゃ・・・」

屋敷の隅で育てられた月詠姫はそれが自分の運命と悟っていた。

しかし、乳母や家臣は姫君を大層大切に扱ってくれたし、両親と天照姫も時々は面会に来る。

何より、天照姫とは離れていても通じ合っているような感覚すらあり、不自由ではあったのだが幸せであった。

だから、姫の身代わりの話が上ったときも一種の恩返しのような気もちがあった。

自分の存在が役に立つというような高揚感すら感じた。

天照姫は猛反対したが、他に手立てがないと諭されるとしぶしぶ従った。

やがて入れ替わりが決行される日がやってきた。
しかしこの日、月詠姫の心が大きく揺れることとなる。

衣装箱の中に潜んで大奥に入ったのち、二人は束の間の再開を涙で過ごす。

その後、入れ替わりが行われた。

天照姫は朱色の打掛けを脱ぎ、月詠姫がそれを纏う。

天照姫の着ていた衣類は全て脱がされて、一枚の襦袢のみの姿となる。

その姿は、月詠姫が大奥に入ってきた姿とまさに同じものであった。
天照姫はもともと衣装箱の中にもぐりこみ蓋を閉め、運ばれていた。

事が全て終わった後、ふと鏡に映った月詠姫は自分の姿を見て息を飲む。

そこに映っていたのは常に日なたを歩いてきた天照姫そのものだったのである。

「似ているとは思っていたが、ここまでとは……」

お付の奥女中たちも感嘆と驚愕の声をあげた。

このとき、月詠姫に魔がさした。

もしも、このまま天照姫として生きることができたら、どんなに楽しいだろうか。

思えばこれまで天照姫ばかりがいい思いをしている。

天照姫が話してくれた花見や祭りもどれもこれも憧れるだけで終わった。

華やかな人生を歩みたい。

天照姫はもう、十分楽しんだではないか・・・。

月詠姫は、女中達の目を盗んで正秀院に会いに行った。
そして、全ての事情を話し、自分の命を助けてくれるように頼み込んだ。

それが、昨日の昼下がりのこと。

丁度一真達と下府中侯が鉢合わせをしていた頃だ。

「正秀院は約束を破ってわらわを殺そうとした。罰が当たったのやもしれぬ」

月詠姫は遠くを見つめ、フフツと自嘲した。

天照姫と月詠姫 その二

月詠姫はまるで幽霊のようにふらふらとおぼつかない。

目にも力はない。

自害もありうると思い一真は月詠姫の動きに備える。

その時、天照姫が月詠姫の前に立った。

同時にパチンと軽い音がした。

天照姫が月詠姫の頬を叩いたのだ。

「愚か者つ。そなた一人が不幸な顔をしておつて」

天照姫の声が震える。

「わらわだって、恐ろしかった。そなたという代わりがいつだって用意されておるのじゃ。価値がないと思われた瞬間、わらわこそ屋敷の隅で暮らすことになるであらう。じゃから嫌なことにも、困難なことにも耐え続けなさいといけなかった。しくじれば、そなたがわらわの替わりとなるからじゃ」

頬を叩かれた月詠姫の目に生氣が戻る。

天照姫は続ける。

「その恐怖はずっと押し殺してきたはずじゃった。けれど入れ替わりのあの日、打掛け姿のそなたを見てわらわは、恐ろしくなったのじゃ」

天照姫もまた、打掛けを取られ、襦袢一枚になった自分に心細さを憶えた。

將軍の側室にまでなったとはいえ、打掛け一つで日なたの存在になつていたことに気づかされたのだ。

岩木屋敷についた直後は、月詠姫の存在が消えることをひたすら願つていた。

けれどその気持ちは屋敷で洗い流されるように消えていった。

それもこれも岩木が常識の通用しない破天荒な旗本だったからだ。

わがままが過ぎて家臣や娘からこっぴどく叱られる岩木。
しかし老中にも遠慮なく意見をする岩木。

そんな型破りな行動をみているうちに姫君は今まで流されるままに生きてきた自分に気づいた。
そして根本的な問題を解決することに思い至つたのである。

「何故、同じ母から同じ日に生まれたというのに、姫という立場は一人分しか用意がないのか。それを二人で取り合い、怯えて。おかしいじやろう。月詠、そなたを解放したいのじゃ。森津の家の悪習はわらわがなくす」

天照姫が月詠姫を抱き寄せる。

「片時でも、死ねばいいなどと思ってしまい恥ずかしい。でもそなたが生きてくれていて本当に良かった」

「天照、本当に申し訳ない。申し訳ない」
月詠姫は泣きながら天照姫にすがった。

月あかりが円窓から入り二人を丸く照らす。

一真達は、二人の様子を見てほっと胸をなでおろし後始末に入った。

「兵庫、そつちはどうだ」

「大丈夫、眠らされているだけみたい」

姫付きの置く女中は隣の部屋で皆眠っていた。

どうやら食事時に薬を盛られたらしい。

一真達はその一人ひとりに刀を握らせた。

「いいですか、この黒装束の無法者は奥女中たちが成敗いたしたのです。けっして同心ふぜいが、お城に忍び込んだなどといってはいけませんよ」

天照姫に安次郎が念を押す。

庭にはのびきった男たちが木に結わえ付けてある。

少し締め上げれば何もかもを白状するだろう。

二人の姫は、この部屋に残る。

「大丈夫ですか」

一真は少し心配だったが、天照姫は頭を振る。

「ここにいるのはわらわの妹、月詠じゃ。もう、隠すようなことはせぬ」

そついい切り、月詠姫を見て微笑みかけた。

「そろそろ退散するか」

全ての処置が済み一真が言った。

二人は一真達に深々と頭をたれた。

その姿に会釈をして三人は城をまた抜け出る。

東の空が白み始め、江戸の町がまた静かに朝を迎えようとしていた。

終幕

数日後、一真達は岩木屋敷に呼ばれた。

岩木は満面の笑みを浮かべて3人の背中を大きな手でしばしと打った。

「いやあ、お前たちのおかげで、正秀院派は総崩れだ。下府中侯は謹慎、お前たちと道で争ったことも向こうに非があるという運びだ。正秀院様の口出しが減って公儀がつらつら進むわ。阿部様もたいそうお喜びだったぞ。褒美もたんと出すそうさ」

一真達が城を離れた後、岩木達は怒涛のごとく後始末に入った。

3人の機転もあって思いの他簡単に後始末は進んだ。

まず、黒装束の男たちは門番を気絶させて忍び込み天照姫を殺害しようとして試みるが、無我夢中で応戦した奥女中たちに返り討ちに合った。

その後、女中たちは疲れ果てて眠り込んでしまった。

少し無理もあるがそんな筋書きに出来上がっていた。

「月詠姫はどうなりましたか」

一真が気になっていたことを訊ねた。

「うむ。あの後、森津殿がすぐ奥に面会にいったら、親子3人で話し合ったそうさ。」

運よく、朝早い時間ということもあり、天照姫と月詠姫が二人でいるところを目撃したものがほとんどいない。

森津侯は、こっそり大奥から出す算段をつけていたようだが、天照姫は承知しなかった。

それどころか、月詠姫を皆に紹介したいという。

森津侯はその提案に仰天したが、侵入や小細工がばれて老中派を失墜させるわけにもいかない。

とりあえず、その場は穏便に済ますように説得し二人を納得をさせた。

しかし森津侯も今回の件で、月詠姫の不憫さ、そして愛しさを身をもって感じたらしい。

「月詠には悪いことをした。今度はお前達の母も連れて3人で天照姫に会いに行こう」

そう月詠姫に言ったそうだ。

現在は上屋敷の母屋で、はばかりことなく母と一緒に暮らしている。

「よかった」

3人は心が晴れるのを感じた。

岩木も満足げに遠くを見ながらつぶやいた。

「今のところ何もかもがうまくいっている。ただあやめがな」

急に暗い顔になり、ため息をついた。

「傷がお悪いんですか」

安次郎が心配そうに聞く。

「いや、傷はともかく・・・その、折角怪我したんだからいろんな薬品を使いたいとか言い出して」

「もしや、傷を治すことそっちのけで、いろんな薬を塗りたくってんですか」

一真はあきれた。

「あんな、やりかたしたんじゃあ、治るものもなおらんわ」
岩木は深くため息をついた。

「そんなに心配されなくてもお薬をつけているんですもの。いつかは治りますわ」

たん、とふすまが開いて、黒い着物に黒い帯のあやめが入ってきた。首にまでかかっている包帯が痛々しい。

「ご心配いたみいますわ。一真殿こそご公務散々だったんでしよ
う」

フフ、とあやめが笑った。

実はあの後、一真だけが出勤だったのだ。

「眠くて眠くてたまりませんでしたよ」

しかも、居眠りをしているところを上司に見つかり大目玉を食ったのだ。

「もう少しで切腹だったんですよこいつ。でも、そんなこといった

「兵庫は腹がいくつあっても足りないけどな」
安次郎が意地悪くいった。

「何だよ、俺は見つかるようなへましないっての。安次郎だって時々、公務中に女ひっかけてるじゃないか」

兵庫がそこまでいったところで3人はハッとして、岩木を見た。

「町奉行としてそれは聞き捨てならんな」
低い声でつぶやいた。

新米同心たちはひいっと小さな悲鳴をあげる。

「こやつらを逃げないようにつないでおけつ。その後・・・吉原で酒地獄の刑にしてやるわあ！」

がはは、と岩木が豪快に笑い部屋を出て行った。

3人はほつと胸をなでおろした。
そよそよと柔らかな風が客間に入ってくる。

「良い風ですこと」
あやめが目を細めた。

ふと、一真は姫君たちの顔を思い浮かべた。
アイデンティティ
自分自身を無視されて、うわべが似ているだけで同一視される。
自分を押し殺すことが美学とされるこの時勢では、同一人物にでも
ドッベルゲンガー
あつた気分になるのではないか。

「似すぎる双子というのもつらいのかもしれないですね」
疑念が言葉となって漏れる。

あやめが一真をちらりと見て、再び風の方を向いた。

「さあ、どうかしら。でも、自分と姿も性格もそっくりな方がいれば私は絶対にお友達になりたいと思いますけどね。きっと楽しいと思うわ」

フフ、と笑った。

終幕（後書き）

長い時間おつきあいいただきましてありがとうございます（＾ー＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7420/>

秘密の双子姫～新米同心3人衆の受難～

2010年10月10日23時55分発行